

序

盆地という言葉は、一般には地形学上の用語として受け取られているようで、この序を書くに際して数種類の百科事典に当たってみたが、どの事典も地形的な説明を記載するのみであり、地理学辞典もまた同様であった。

しかし、私達が盆地という言葉から連想し、想起するのは、「周囲の大部分を山地に囲まれた土地で、地盤が周辺に対し相対的に沈降した結果形成される平地」（平凡社大百科事典）といった地形的なことだけであろうか。少なくとも私には、必ずしもそうではないように思われる。

一口に盆地とはいっても、その位置や規模、形態や構造は千差万別であり、どのような盆地を念頭に置くかによって、そこから連想され、想起される内容は違ってくる。山奥深く高く険しい山々に囲まれ、かろうじて少数の村落を立地させているだけの山間小盆地と、緩やかに起伏する丘陵や山地に囲まれてはいるものの、広々と開けて幾つもの都市や村落を発達させている大盆地とでは、おのずからその性格は異なっている。これらの中間にもさまざまな個性を持った盆地がみられる。

わが国には盆地が多い。しかもそれらは、それぞれに豊かな個性を示している。その個性は、地理的位置や地形的構造といった自然的条件に影響されながらも、そこで繰り広げられてきた人間活

動の所産として生みだされたという側面が強い。もちろんそこには、盆地という地形的單位に共通したもの、そうではないものがあることはいうまでもない。

盆地の個性と共通性を地理学の立場から検討した研究は、古くは中央高地の諸盆地を対象とした田中啓爾、亀岡盆地を対象とした織田武雄のものなどがあり、その後も各地のいろいろな盆地を対象に、多くの人々がさまざまな角度から研究を積み重ねてきている。その蓄積は、量的にも質的にも、相当な水準に達しているものと思われるが、今日までのところ、それらの諸成果を十分に整理・統合したうえで、新しい地平を切り開き展望するような動きは顕在化していないようである。

「盆地の歴史地理」を共同課題とする本書が、盆地というものを改めて見直し、その人文社会的、あるいは歴史的文化的性格を考えるきっかけとなり、将来的には、盆地が地形学的に説明されるだけではない状況が生み出されることを期待したい。

末尾ながら、本書の上梓に際しては財団法人畠山文化財団から多額の助成金を賜ったことを付記し、ここに謝意を表する。

一九八九年三月

小林健太郎